



医療の現場アラカルト - Vol.16

英語担当 Eさん

医療通訳士が患者さんにかかわる時間は、患者さん一人ひとりの人生の時間を考えれば、ごく限られた時間にすぎません。しかし限られた時間の中で、患者さんの病気に関することを含め様々な背景や事情に触れることもあり、それぞれの人生のちょっとしたストーリーを垣間見たような気持ちになります。

そのストーリーは、旅行中に思わぬ病気に見舞われ入院し、退院の見通しが立ったものの、中東での戦争が原因でフライトがキャンセルされてしまった、などの旅のトラブルや、生活にかかわることなど多岐にわたります。最近の出来事で印象に残っているのは、在留資格を延長するために入管に提出する診断書を、改めて発行してほしいと言ってこられた患者さんです。なんでも、すでに前に病院から発行された診断書を提出したものの、日本に留まる必要のある理由として認められなかったため、更なる治療が必要であると見込まれると書いた書類を発行してほしい、このままでは近いうちに強制的に母国に帰らざるを得なくなってしまうとのこと。

実際に行った治療についての事実しか記述できない、と説明したものの、「母国では満足のいく医療を受けることができないから、どうしても日本に留まりたい!」と訴えられ、その訴えから日本以外の国の医療事情が見えてきて、思わずその人のこれまでの人生ストーリーを想像しました。その後、手続きがどうなったか、私は知ることはありませんでしたが、数ヶ月してから別の診察で病院を受診された際に再度通訳を担当しました。直接伺ったわけではありませんが、どうやら無事に日本に留まることが許されたようで、私の中で、短いストーリーがつながった瞬間でした。

通訳を担当する患者さんとの関わりが一回限りでも、またごく限られた時間であったとしても、そのストーリーの先が幸せなものであるように、と通訳士としてはいつも願わずにはいられないのです。



手術前の 献血文化



アルゼンチンでは、手術を受ける際の条件のひとつとして、家族や友人に献血を依頼する習慣があります。血液型は患者と一致している必要はありません。これは、提供された血液がそのまま血液バンクに保存され、必要に応じて使用される仕組みだからです。手術の種類や規模によって、必要なドナーの人数は変わります。また、一般の血液バンク用の献血も日常的に行われています。

ペルーでも同様に、手術が決まると患者の家族が周囲に献血を呼びかけます。最近では、自分たちでSNSを活用して、多くの人に献血を促す方法が一般的になってきました。家族や友人だけでなく、見知らぬ人からも献血が集まることがあります。

このような文化には、地域のつながりや助け合いの思いが表れていますね。

ところで、中国では「パンダ血」と呼ばれる希少な血液型を持つ人は、手術に備えてあらかじめ自分の血液を貯めておくことがあるそうです。

今月のトピックス



「日経バー」って、 株価をつまみに飲む店ですか？

南米に住んでいる家族から「この漢字あってる?」と届いた写真を見ると、飲食店のメニューのトップに印刷された「NIKKEI BAR 日経バー」という店名。「株価をつまみに飲むバー?」と想像し、クスッと笑いましたが、現地で日本料理との融合が流行っていることを知っていたので、「日系の食事が楽しめるバー」ということはすぐに想像できました。

意味を深く知らないまま英語のTシャツを選ぶように、雰囲気だけで言葉を扱うことがありますね。メニューや看板であれば笑える違いも、私たちの「医療通訳」という仕事では、「ひと言の違い」が重大な問題につながるため、気を付けなければなりません。どの言語でも、似ている発音で意味が異なる言葉というものがあります。誤解から患者さんが混乱されたり、医療ミスを招く可能性につながったり、医療現場では命に関わることがあるからこそ、言葉の正確さに向き合い続ける必要があります。家族との気軽な話題から、言葉の微妙な間違いによる面白さと繊細さ、その両方を改めて考えさせられました。



外国語ネイティブに「トリアージ」が一瞬「鳥味?」

と聞こえることがあったそうです。

実際には間違いませんが、長音「ー」は、外国人にとって、聞き分けにくい日本語の特徴のひとつです。

